

ごみ減量化に一人ひとりが取り組みましょう！

みんなで考えよう シリーズ6(最終回)

ごみ処理の現状

市では、長年使用してきたごみ焼却施設に替わる、新ごみ焼却施設建設の検討をすすめています。

ごみの発生抑制や処理については、市民の皆さまのご理解とご協力が必要であり、ごみ処理事業に関する情報をシリーズで提供しています。

最終回は、説明会などでよく出されるご質問やごみ処理に関わる最近の話題についてお知らせします。

問合せ 生活環境課 ☎35-3138

現施設の稼働期間は

資源リサイクルセンターの焼却施設は、昭和61年3月に竣工し、本年3月で稼働から32年が経過しました。

平成14年3月にダイオキシン類対策をはじめとした基幹改良工事を終えて、平成30年度まで延命化してきましたが、新施設完成までにはまだしばらくの期間を要します。現施設の稼働期間を平成37年度末として、今年度から延命化工事を3力年にわたり行うこととしました。

延命化工事の実施により、施設の性能を維持し、安全で適切なごみ処理を稼働期間終了まで継続してまいります。

同様に、久々野町にある久々野クリーンセンターの焼却施設も延命化工事を行い、平成37年度末までごみ焼却処理を継続します。

新施設の概要は

新しいごみ焼却施設の稼働開始時期は、平成38年度を予定しています。

施設の規模は、ごみ処理人口、ごみ発生量、年間稼働日数などの項目に基づく推計に加え、近年多発する自然災害で突発的に発生する災害ごみを一定量見込んで算定します。

また、焼却する可燃ごみの成分を分析して、焼却炉の形式や性能を計画していきます。

さらに、昨今のごみ焼却施設には安全対策、環境対策を基準以上に厳しくしたうえで、環境学習機能、防災機能およびごみ焼却に伴い発生する熱の活用機能を持たせることが求められていることから、今後検討をしております。

周辺地域の皆さまのご理解のもと

市では、三福寺町の資源リサイクルセンターの焼却施設の老朽化などにより、新施設の建設を検討しています。

現在、資源リサイクルセンター焼却施設の東隣を新施設の建設候補地として考えています。

これまで、長期にわたり、ごみ処理施設の周辺地域の皆さまのご理解、ご協力のおかげで、市のごみ処理施設の稼働を続けることができました。

今後もごみ処理事業を続けさせていただくため、環境に十分配慮し周辺地域の皆さまのご理解のもと、安全で適切なごみ処理を継続してまいります。

ごみを減らすために

市で収集した家庭ごみの全重量のうち、可燃ごみの重さが約77%を占めており、その可燃ごみの約半分が水分になります。

ごみ減量化のため、家庭で発生した生ごみは、ギュッと水を切って捨てるようご協力お願いします。左の写真は、水切り袋を利用した例です。

生ごみを捨てる



水をよく切る



そのまま捨てる



ダイオキシン類とは

ダイオキシン類は、主に「ものが熱せられる過程で自然に生成されてしまうもの」であり、ごみなどの焼却のほか、自動車の排気ガス、たばこの煙、山火事、火山活動など様々な発生源があります。

そのため、量は非常にわずかですが、「環境中に広く存在しています」。

ダイオキシン類には、炭素・酸素・水素・塩素の組み合わせにより200以上の種類があり、かつて電気機器に使われていたPCBや一部の農業に不純物として含まれていたものもダイオキシン類の一種とされています。

ダイオキシン類対策は

平成12年に施行された「ダイオキシン類対策特別措置法」で廃棄物処理施設からの排出基準が設けられたことなどにより、国全体の排出量は施行前に比べ大幅に減少しました。(図1)

資源リサイクルセンターでは、平成12年度、13年度に排ガス高度処理施設の改良(基幹改良)を実施し、バグフィルタの設置などによる対策を強化しております。

同様に、久々野クリーンセンターでも、平成10年度にダイオキシン類発生抑制工事を実施しております。

日本人の摂取量は

厚生労働省の調査によると、日本人が一般的な生活で摂取する一日あたりのダイオキシン類の量は、体重1kg当たりの耐容一日摂取量4pg・TEQに対して約0.85pg・TEQと推定されています。

また、内訳として魚介類などの食品から摂取するものがほとんどであり、呼吸により大気から取り込む量は少ないと考えられています。(図2)